

ナショナリズムに思う

川田順造

かわだ じゅんぞう／人類学者。1934年東京生まれ。日本のほか、西アフリカ、フランスでそれぞれのべ九年滞在調査。東西南の参照点による「文化の三角測量」を提唱。東京外国語大学名誉教授。著書、「口頭伝承論」(平凡社)、「人類学的認識論のために」(岩波書店)、「母の声、川の匂い」(筑摩書房)などがある。

最近ナショナリズムということをも、さまざまな時と場で考えさせられる。

前首相の参拜もあつた昨年八月一五日の靖国神社は、過去最高の人出といわれた。地下鉄の出口から大鳥居まで、ピコを配つたり大声に訴える人たちが混み合うのは例年通りだったが、昨年は東条英機自殺未遂をめぐつて立て着脇で激論していた男の一人が「お前は非国民だ」と相手を罵つていた。非国民という言葉が人前で叫ばれるのを、戦後初めて私は聞いた。

戦争を知らない若者たちは、参道の一面で行われていた集会で「咲いた花なら散るのは覚悟、みこと散りましょ国のため」と大声で合唱していた。彼らは、私などの幼時の記憶に焼き付いている、忌まわしい神がかり軍国主義に、自分をどう重ね合わせていたのだろう。神社付属の遊就館の売店には、やはり戦争を知らない世代の、首相になりたい人が大急ぎで出した『美しい国へ』という、意味不明の題の本が山積みされていた。

西アフリカ、ダホメ王国最後の王で、植民地化のため侵入したフランス軍と戦つて死んだ王が遺した王宮を復元する、ユネスコの世界遺産事業に、私は七年來参加してきた。復元完成の昨年がその王の死後一〇〇周年に当たるので、この王を「国家英雄」としたベナン共和国の国家行事に招待された。一七、八世紀に、軍事王国ダホメは近隣の民を捕らえて火器や火薬を引き替えてフランスの奴隷商人に売り、勢力を拡張した。一九世紀末、ダホメ王国もその一部だったこの地方を征服したフランスは、この王国構成員

以外の住民の方が多かったにもかかわらず、ダホメのフランス語読み「ダオメ」を、この新植民地の名とした。独立後も新政府は植民地の領土と名称を受け継いだので、この王国の犠牲になつた多数の人々の子孫も、同じ国家の国民とされた。一九七五年国民の融合を図るため、時の軍人大統領がダオメという国名を、現在のナイジェリアにやはり奴隷貿易で栄えた旧ベニン王国の名をとつて、フランス語読みにした「ベナン」に変えた。

植民地として区切られた日本の三分の一にもみたない国土で、経済自立の見通しの立たないこの国が、国家英雄崇拜を通じて、国民の意気を高めようとするのは理解できる。だがそれは、かつてフランスが他の西欧列強との力関係で勝手に引いた境界を、今度はアフリカの住民が自らの意志で国境として追認することに他ならない。

昨年一〇月には民博の公開講演会で、オーストラリアという国民国家のあり方と、先住民の「国民」への統合、移民の制限をめぐる問題について考えさせられた。いわゆる先進諸国に比べて、格段に増加率が高いインドとサハラ以南アフリカの人口が今後急増し、「国家」間での移民の送り出しと受け入れの問題は、地球規模でさらに深刻化すると思われる。もちろん、日本においても。

新自由主義経済と情報・流通・移動のグローバル化、貧富の格差増大のなかで、国家、国民はどうあるべきなのか、その趨勢への情動的反応でもあるナショナリズムの過熱化にどう対処すべきなのか、人類学者の見識が問われている。

ことは人事より始まる
大森 康宏

16 外国人として生きる
日本のいろいろな学び方
市川 哲

18 地球を集める
バタックのタイコ
福岡 正太

20 生きもの博物誌
トナカイと生きる
福村 哲也

22 フィールドで考える
今日もスタダコから
高野 さやか

24 開館30周年記念 特別展
聖地・巡礼 ー自分探しの旅へー
次号予告・編集後記

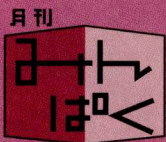
もう一つの観光？
ーイタリアのアグリツーリズムー
宇田川 妙子
マサイ村のエンターテインメント
岩井 雪乃
住民参加型のペルー遺跡観光
関 雄二

08 未来へひらくミュージアム
戦争を語る、
オンリーワンの博物館を
齋藤 義朗

11 表紙モノ語り
ペー(白)族の民族衣装
横山 廣子

12 みんぱくインフォメーション

14 みんぱくを離れるにあたって
さよなら民博
山本 紀夫



目次

MARCH 2007
月刊みんぱく

3

01 エッセイ 世界へ世界から
ナショナリズムに思う
川田 順造

02 特集 ツーリズム
「観光」という名の幻想
山村 高淑

日本人の旅の心根をめぐって
目崎 茂和

韓流ツアーから見る旅の類型
林 史樹